# 一人で悩まず相談を！～増えるデートＤＶ～

今年４月から「ラスト・フレンズ」というテレビドラマが放送されこのドラマは多くの反響を得た。このドラマでは様々な悩みや問題を抱えた若者たちを真正面から取り上げた社会派ドラマだった。その中に恋人からデートＤＶを受ける登場人物がいた。今若いカップルの間でデートＤＶが増えてきていると聞く。また相談をせず１人で苦しんでいる人が多いという。デートＤＶとはどのようなものであるのか、何故起きるのか、現状や対策などを今回調べたいと思い取り上げた。

## デートＤＶとは・・・

ＤＶ（ドメスティック・バイオレンス）とは夫婦など親密な関係の間でふるわれる暴力のことである。高校生や大学生などでも婚姻関係のない交際相手から暴力をふるわれることがあり、これを「デートＤＶ」という。

## どのような暴力があるのか・・・

| | | |
|---|---|---|
| 身体的暴力 | ・腕などを強くつかむ・つねる・たたく・なぐる・ける・かむ<br>・髪をひっぱる、つきとばす、刃物などを使っておどす<br>・相手に向かって物を投げつける<br>など | |
| 精神的暴力<br>（心理的暴力） | ・いやな呼び方をする<br>・バカにしたり、傷ついたりする言葉をいつも言う<br>・「やせろ」などからだのことを言う<br>・フキゲンになる、無視する<br>・大声でどなる、にらむ、暴力をふるうとおどす、物をこわす<br>・やさしくするのと暴力を交互にして混乱させる<br>・暴力をふるっても「たいしたことない」「やっていない」などと言う<br>・不都合なことの責任を押しつける<br>など | |
| 行動の制限<br>（社会的隔離） | ・メールや電話の着信履歴をチェックする<br>・行動や服装などを細かくチェックしたり、指示したりする<br>・友人関係を制限したりして、孤立させる<br>など | |
| 性的暴力 | ・無理やり性的行為をする<br>・無理やりいやらしい雑誌やビデオなどを見せる<br>・避妊に協力しない　など | |

| 経済的暴力 | ・ふたりのデート費用などいつもお金を払わせる<br>・お金を借りたまま返さない<br>・無理やり物を買わせる<br>など |
|---|---|

http://1818-dv.org/index.html　「それってデートＤＶなんじゃない？」デートＤＶ予防サイト

## なぜデートＤＶが起こるのか・・・

デートＤＶを起こす社会的要因には（１）力と支配、（２）暴力容認、（３）ジェンダー・バイアスの３つがある。

（１）　力と支配

いろいろな人間関係の中で「力と支配」が起こっている。私たちの日常生活の中で「力を持つ人は持たない人を力で押さえつけて支配していいのだ」という間違ったことを学んでしまう。その人を人として対等・平等に見ないこととなり、親密な関係の相手に対しなりがちとなる。

（２）　暴力容認

現在暴力で問題を解決しても構わないといった、暴力について誤った考えが社会に満ちている。特に男性が命令したり、攻撃的、暴力的な言動をしたりすることは男らしいことである、という誤った情報がメディアなどを通じて流されている。

（３）　ジェンダー・バイアス

ジェンダーとは「女らしさ」「男らしさ」といった社会的につくられた性別である。そしてバイアスとは「偏見」であり、私たちは生活の中で様々な形でジェンダー・バイアスを体験し、影響を受けている。「男らしさ」は中心になるや、力を持つというイメージであり、「女らしさ」は男性を支える、自分を出さずに従う、というイメージが強く社会の中にある。このようなジェンダー・バイアスを強く当たり前に思っている男女が親密な関係になると、２人の関係には力の差が出来てしまう。対等・平等な関係ではなく、上下や主従の関係になってしまい、これらがデートＤＶに繋がっていくのである。

参考：大分県生活環境部県民生活・男女共同参画課　発行　　「デートＤＶ～これって愛？」

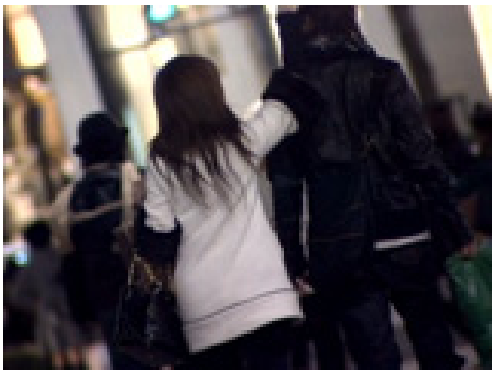
## 実態

交際している 4～5 人に 1 人がデートＤＶを受けているという調査結果がある。また内閣府は 2007 年 11 月恋人間のデートＤＶについてのアンケートの調査結果を次のように発表した。

身体暴力だけでなく「いつも気を使わせられる」「行動を制限される」など精神的暴力も含めたアンケートを実施したところ、何らかの被害を受けたことがあると回答した人は半数近くに上った。恋人からの被害経験（複数回答）では「急に機嫌が悪くなったり、優しくなったりしていつも気を使わされる」が男性 42.2%、女性 25.4%で性別を問わず最多であった。女性の場合は身体的、性的暴力を受けたケースも目立ち「避妊に協力してくれない」は 12.3%、「性的行為を強要される」は 9.2%、「物を壊すなど怖い思いをさせられる」は 6.9%だった。相談した相手（複数回答）では「友達」が 55.5%で最多であったが、42.7%は誰にも相談していなかった。

## 「愛？」それとも「暴力？」　デートＤＶに気づかない・・・

「だって彼、私だけに優しかったから」とマミさんは振り返る。今は主婦として幸せに過ごしているが、独身時代の恋人に受けた暴力の記憶をぬぐいさることができないでいる。恋人は会社の上司で４つ年上だった。少し強引ではあったが、そこが男らしく感じられ、他の女性にもモテていたということだ。「街中でチンピラみたいな人に絡まれたときも、にらみ合いで追い払えるほど迫力のある人でした。暴力沙汰もたまにあったけど、女性には優しいと思っていたんです」。



最初のデートの日、ベッドに誘われたが断った。コンドームを持っていないと言えば、我慢してくれた。その優しさが嬉しかった。しかし「恋人同士」という関係をお互いに認知したころから、相手の態度が少しずつ変った。

「男性が混じる飲み会に行くと、機嫌が悪くなって怒鳴るんです。胸の開いた服も、化粧も、アクセサリも禁止。そのうち彼の機嫌を損ねると壁にぶつけられたり、床に投げられたりと露骨な暴力がはじまりました。暴力よりも一番傷ついたのは私のことをウジムシって呼ぶことでした」。

体中をアザだらけにしながら、マミさんはなぜ別れなかったのだろう。

「別れ話を切り出したら何されるかわからない。彼の逆ギレが怖い。そういう気持ちももちろんありました。でも、逃げられなかったのではなくて、逃げなかったのかとも思うんです。愛しているから、お前だけが可愛いから、殴るんだって言うんです。ウジムシなんて呼んでおいてそんなの変だって思うんですけれど、散々暴力を振るわれたあと優しくされると『こんなダメな私を愛してくれるのか』なんて思ってしまうんです」

散々暴力を振るったあと、恋人は脱力したマミさんを抱いた。気力を無くしたマミさんは彼にされるがままになり、避妊を懇願することもできない。しかし彼の子どもを流産した日、ようやく別れを決意できたという。それから数年がたち、今は恋人からの暴力に悩む知り合いの相談に乗ることも多くなった。

「最近は携帯電話を使った束縛も多いようです。男性名のアドレスを勝手に消されたり、GPS を使ってどこにいるのかをすっかり把握されたりね。度を越えた束縛だと指摘しても、愛しているからと繰り返されると、ヤキモチのひとつも焼かれないよりマシかと思ったりするそうです」

強引なこと、嫉妬すること、束縛すること。それらを愛情だと喜ぶ女性も多く、確かにそういう一面もある。しかし、そこに「脅威」を感じたらもうそれは“暴力”だ。最後にマミさんは読者にこう伝えたいと話した。「愛されていると信じている人に恋人の DV を認めさせるのは難しい。私もそうでした。でも周囲に恋人による DV に悩んでいる人がいれば、あきれずに繰り返し相談に乗ってあげて欲しいんです。いつか目が覚める日がきっと来ますから」

http://news.livedoor.com/article/detail/3420570/　livedoor ニュースより

## デートＤＶ対策

ＤＶ対策に本腰を入れる市町村が増えている。2008 年１月に施行された改正ＤＶ防止法が、配偶者暴力支援センター（ＤＶセンター）の設置などを市町村の「努力義務」として明記したことが、後押ししている。

千葉県野田市は 2008 年１月１１日の法施行と同時に、市役所に「市配偶者暴力支援センター」を設置。相談・保護、自立支援を民間団体と連携して一体的に行う「市ＤＶ総合対策大綱」もまとめた。被害者にとって、窓口を何か所もたらい回しにされ、窓口が替わる度に被害の説明を求められることが、大きな不満とされてきたが、同市では改善が進むことになった。

市町村レベルの取り組みは、生活に身近な範囲で行われるだけに、加害者対策や被害者のプライバシー保護も課題になる。名古屋市は法施行に先駆け、2007 年７月、市独自にＤＶセンターを設置したが、場所は明らかにしていない。市に専門の担当者を置き、市内１６区にも女性相談員を配置し、相談を受けてから支援までの流れを制度化した。

改正ＤＶ防止法は、これまでは都道府県の政務としたＤＶセンターの設置と地域の実情に応じたＤＶ施策「基本計画」の策定を、市町村についても努力義務とした。国は法施行と同時に、施策の考え方や方針を示した「基本方針」を改訂・告示。市町村には「被害者に最も身近な行政主体として積極的な取り組みを行うことが望ましい」とした。内閣府によると、市町村が設置したＤＶセンターは、野田市と名古屋市のほか、札幌市（２か所）、神戸市、岡山市、北九州市の６市７か所になっている。（2008 年 4 月現在）

また、誰かに話を聞いてもらい相談をすることは何よりも重要なことである。インターンネットや電話でも相談は可能である。しかしやはり身近な人に理解してもらえる環境が一番求められるだろう。そして、デートＤＶを未然に防ぐことも求められる。暴力やジェンダー・バイアスの誤解を解くこと、自分自身、相手のことを大切に考えること、これらは社会に求められる変化である。

参考：2008 年 3 月 14 日　読売新聞

## 考察

私は「デートＤＶ」という言葉は高校生の時に知った。しかし、デートＤＶがどのようなものであるかということを知ったのは大学生になってからだった。「デートＤＶ」という言葉と内容は多くの若い人たちに浸透しているとは言えない実態がある。そのためデートＤＶの被害は増え、社会問題として浮き上がってきているのではないかと考える。テレビドラマによってデートＤＶがどのようなものであるのかを知った人々は少なくないだろう。けれどもこのようなことはなかなか起こりはしないだろうと思った人もいたかもしれない。また、上記の体験談でお話されている「愛されていると信じている人に恋人の DV を認めさせるのは難しい。」というように、「私は違う。」と思っている人もいるのである。そして気づいていない場合もある。実際に私自身もデートＤＶの暴力にどのようなものがあるのかを知った時に初めて、過去の苦い思い出の出来事でデートＤＶに値するものがあったと気づいたことがある。この時までこんなにもデートＤＶが身近なものであるとはわからなかった。様々なデータがあるが、今回調べて思ったことの一つとしてもっと多くの人々がデートＤＶによって苦しんでいるのではないかと思った。

またデートＤＶを受けているとわかっていても、誰にも相談しなかったという人が約半数近くいるということを知って驚いた。誰にも相談できず１人で我慢して苦しんでいる人のことを思うとどんなに苦しいだろうと、とても心が傷む。

今回調べて初めてデートＤＶの起こる要因として社会的要因が深く関わっていることを知った。しかし、これらはすぐには変えることはできないものである。内閣府は調査を行い、ＤＶ防止法も改正され、市町村もＤＶ対策に本腰を入れ始めた。これらのことは被害を受けている人、加害者も含めもっと多くの幅広い人々に伝わらないと何も変化しないであろう。デートＤＶについて今現在より強く変化させるために取り組んでいく必要があると思った。

自分一人が苦しんでいるのではないこと、相談できる場所があるということなどがもう少し社会に知れ渡ることが出来たら、苦しんでいる人々も少しは安心でき救われるのではないだろうかと思う。またデートＤＶのことを分かっていると、自分でなくても身近な周りの人にＤＶによって苦しんでいる人がいることに気づくことが出来、少しでもその人の手助けをすることが出来ると思う。私は今回デートＤＶを調べることで、もしそのような人に出会ったならば親身になって相談に乗りたいと改めて強く思った。また、ＤＶに対する対処の仕方なども私に何が出来るかを考えていきたいと思う。そして何よりも、相手のことを１人の人間として平等に尊重し合い、助け合い、愛し合うことの出来る関係が作れる社会になることを切に願う。

デートＤＶ防止プロジェクト・おかやま　作成パンフレットより